

新任小学校教師の経験と変容

1年間の縦断的インタビューを通して

Experience and transformation of new teachers of elementary school

曾山いづみ

Izumi SOYAMA

(東京大学大学院教育学研究科)

Graduate School of Education, The University of Tokyo

Key words: 新任小学校教師, 経験, TEM

目的

ベテラン世代の大量退職に伴い、東京都の小学校では「先生が足りない」という状況がある。新任教師はこれからの教育を担っていく存在でもあることを考えると、新任教師に焦点をあてた研究が必要だと考えられる。

新任教師に関する先行研究では回顧的なデータが多く、「今、ここで」の新任教師の経験を扱った研究は少ない。「新任期」は多くの経験を積み重ね、最も大きな変化が起きる時期であることを考えると、この時期の実態に即した経験をより細かくみていくことが必要だろう。

そこで本研究では、新任小学校教師がどのような経験をしているのか、それによってどのような変容をとげているのかを明らかにすることを目的とする。本研究のリサーチクエスションは以下の通りである。

- ・新任小学校教師はどのような経験をしているのか、どのような経験が意味を持つのか
- ・それらを通してどのように変化していくのか

方法

都内あるいは近県で勤務している新任小学校教師7名それぞれに1年間計4回のインタビューを行った。インタビュー時期は1学期(09年5~6月)、夏休み(09年8月)、2学期(09年9~10月)、3学期末以降(10年3月~5月)である。インタビューデータは逐語化し、複線経路・等至性モデル(TEM、サトウら,2009)を用いて分析を行った。

結果

新任小学校教師の経験は幅広いものを含んでいることが示された。具体的には、「生活リズムに慣れていくプロセス」「同僚教師や保護者とかかわっていくプロセス」「子どもとのかかわりを考えていくプロセス」があり、これらは「教師としての自分」について考えていくプロセスに集約されていた。今回は、その中で教師の本務とも考えられる「子どもとのかかわりを考えていくプロセス」について着目した。

「子どもとのかかわりを考えていくプロセス」においては、「自分の行動に対する子どもの反応を知っていく」「子ども自身のことを知っていく」ことが重要な経験として見出された。これらは、「子どものことが「わかって」くるプロセス」として新任小学校教師に実感されていた。

「自分の行動に対する子どもの反応を知っていく」ことの中で重要な意味を持つ経験としては、<自分の行動と子どもの行動との関係に気付く><子どもの扱い方>についての知識を得る><子どもが思った通りに動く(うまく行った体験)><自分の行動をコントロールする必要性を実感する><それぞれに入りやすい言い方がわかる>があった。これらの経験を経て、等至点として「子どもの扱い方がなんとなくわかってきたと感じる」(両極化した等至点:子どもの扱い方がわからない)に至ると考えられた。

また、「自分の行動に対する子どもの反応を知っていく」ことと同時に、クラス1人1人の子どもを理解していくプロセスも見られた。

考察

新任小学校教師にとって、「実感」として経験されるものが、教師として変容していく中で非常に大きな意味を持つことが示された。また、経験はただ積み重ねればよいというものではなく、「夏休み」などゆとりのある時間で自分のかかわりについて振り返ることを通して、初めて意味をもつものとして実感されることもあった。経験を積む中でサポートとなるものには同僚教師からのアドバイス、逆に阻害するものとして多忙さ、サポートのなさなどが考えられた。

引用文献

サトウタツヤ(編著) (2009) TEM ではじめる質的研究 誠信書房